

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会
第7回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ議事要旨

日時：2018年8月1日（水）15:00～16:30
場所：釧路地方合同庁舎 4階 第3会議室

【出席者（敬称略・順不同）】

< 専門家 >

- ・高橋 忠一（再生普及小委員会委員長）
- ・境 智洋（北海道教育大学釧路校 教授）

< 学校教員 >

- ・標茶町立標茶小学校 及川 夏美
- ・鶴居村立鶴居小学校 中川 道高
- ・釧路湖陵高等学校 渡辺 理実

< 学校教育行政機関等 >

- ・釧路市教育委員会 学校教育部 教育支援課 指導主事 松本 孝也、畠山 和彦
- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 次長 徳田 裕之

< ワーキンググループ事務局 >

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所
国立公園課課長補佐 桑原 靖則
釧路湿原自然保護官事務所 矢部 敦子
- ・公益財団法人北海道環境財団 久保田 学、山本 泰志、安田 智子

事務局 第7回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ（以下WG）を開催する。

（配布資料、出席者の確認後、及川委員、畠山委員より自己紹介）

以降の進行を高橋座長に願います。（以降、高橋座長により進行）

議事1 第6回ワーキンググループ以降の取組み報告

事務局 資料1について説明。

高橋座長 本日参加された先生からも授業支援に対するご感想をお聞きしたい。

及川委員 報告があった学習発表は現6年生のもの。昨年の課題として、学習の最初に子どもたちを湿原に連れて行った方がいいのではとの意見があり、今年は遠足の機会を捉えて最初にフィールドに連れて行った。子どもたちは見るもの全てに五感を働かせて学習していた。フィールド学習後、個人追及に入ったが、子どもたちが調べたいと考えていることが多岐にわたっており悩みどころ。例えば、毒キノコと毒を持たないキノコの違い、ヤチマナコは底がないならその先はどうなっているか、ブラジルまでつながっているのではないか、直線と蛇行した川で氾濫するかどうかの実験など。自分で簡単な仮説を立て、検証のために何をしたらいいかを考え、実験を始めたところだが、実験できている子とこれからの子がいる。8月28日に標茶高校に湿原を見に行くこととしていたが、8月、9月はフィールドの草丈が高くて危険とのことで、もう一度組み立て直す必要がある。水辺には行けるようなので、仮説検証の実験をさせていただく予定。秋には中間発表会を開き、事務局のスタッフに来てもらい子どもたちにフィードバックをもらう予定。最初はインターネットでの調べ学習ばかりしていたが、パソコン室から離れるように促してきた。実験を始めるとパソコンを離れて外に飛び出していくようになった。子どもたちがやりたいことをやらせて欲しいと事務局から要望もあったので、子どもたちの思いのままに、まずはやらせてみている。

渡辺委員 湿原巡検の1年目は赤沼と久著呂川で体験をベースに学習し、2年目からはスーパーサイエンスハイスクール（以下SSH）として調査に重点を置き、再生事業地でフィールドワークしている。5年間のSSHが採択されたので、今後も継続して取り組みを行いたい。データの蓄積を行うとともに、フィールドワークの手法を学ばせながら、釧路湿原に関心を持って欲しいと考えている。支援体制については事前学習から含めて感謝している。課題としては、その後に湿原をテーマとして選択する子どもが少ないということ。及川委員のお話をお聞きし、小学校から高校まで湿原の学習が繋がっていくと面白いと感じた。

高橋座長 標茶小学校では身近に湿原がある場所で育った子どもたちという印象があるが、湖陵高校の場合は高校に入ってから初めて子どもたちは湿原を意識するのか。

渡辺委員 湿原に関心がある子はクラスに数名程度で、親が湿原に関心がある場合が多い。教員の投げかけ方にも工夫が必要。昨年3月に宮城県の多賀城高校の災害科学科のプログラムに招待され、湿原の防災機能をテーマに生徒がポスター発表を行った。その縁で同校の生徒4名が今年度のフィールド学習に参加してくれた。今後も交流が広がっていく可能性もあり、報告させていただいた。8月31日に学内で発表会を実施する予定。

高橋座長 教員研修についても補足、感想などをお願いしたい。

松本委員 センターでは5年以上釧路湿原の講座を継続してきた。釧路市内の小学校では湿原に容易に行けるわけではないので、子どもと湿原をつなぐために先生に間に入ってもらうために、先生に湿原を知ってもらうということを研修のねらいとしてきた。また、再生事業に興味を持ってもらうためにも、湿原に興味をもってもらいたいと考えている。毎年参加する先生もいる。今年度は降雨があり悪天だったがそこが良かったという意見もあった。昨年度のキラコタン岬での研修で外来種の影響を知り、今回も外来種をテーマとした講座として検

討してきた。その中でウチダザリガニをテーマとし、実際に湿原の中で捕獲を行うとともに、座学として外来種の影響などを学ぶ講座となった。子どもたちはなかなか湿原に行けないという現状ではあるが、総合的な学習の時間の中で湿原を題材にしている学校はあり、そうした学校と実際に湿原を使った学習とが結びつけばと考えている。今回の研修では中央小学校の先生に声をおかけし、関心も高くもっておられたこともあって、学習発表ボードの活用などにも広がりつつある。湿原を題材とした学習を継続的に実施している学校には、研修への声かけや、事務局が行う学習支援の取組み紹介などを行い、先生を通して子どもたちの湿原への関心が少しでも高まることを期待したい。

高橋座長 参加者は8名ということだが、昨年度と比較してどうか。

松本委員 例年と同程度の参加者数。もう少し増えて欲しいところではあるが、他の研修や学校の行事等もあり難しい面もある。

畠山委員 今回の研修では学校行事との兼ね合いもあり数名のキャンセルがあった。実際には様々な体験をさせてもらい大変楽しかった。参加した先生方からも中止とならずに良かった、という感想があった。

高橋座長 天候については事務局ではどのような考えで行っているか。

事務局 安全確保を大前提として状況に応じたプログラムパターンを練って研修に望むこととしている。教員研修は延期ができないのでなるべく実施したいと考えており、今回は警報が出ていないことを確認の上、実施した。

高橋座長 標茶小学校の学習に関わってこられた境委員から、全体を通して意見があればいただきたい。

境委員 一昨年度はインターネットで見たものをそのまま写している子がとても多く、なぜ調べたかを聞くと、先生が調べるように言ったからと答える子が多かった。多くの学校でもこういった状況にあるだろう。今回の標茶小学校の発表では、自分がこれを調べたいからと答え、調べ方についても自分の考え方を持ってやっていた。子どもたちは自分で体験し自分で考えて進めているので、自分で答えようとする。参考資料1にあるように、子どもたちは仮説を立て、自分で調べて自分で納得できる一つの結論を出している。子どもの単純な疑問を上手く生かしてあげることがとても大切だと感じる。そこに先生の指導が入ると先生の範囲に留まってしまう。標茶小学校の良いところは先生も一緒に調べるという姿勢を持たれている。先生もわからないので一緒に調べようというように同じ立場で学習を進めていくことが大切。やってみて結論が出なくてもそれがひとつの結論。そうしたことを認めていくと、中学校や高等学校でも疑問が継続し、先につながっていく。標茶小学校の良い取組みを大事にしたい。

高橋座長 子どもたちの学び方、それに関わる先生たちの教え方のあり方に大きな変化が起こる兆しがある。今そこに向き合い始めた気がする。変化になじむ子なじまない子もいる。その過程でこれから目指す学び方が明らかになっていく。そういったことのためにも、この取組みはきっかけになっていくのではと感じる。

境委員 特別支援学級の子で、ツルの食べ物を調べて発表していた。単純なことだが自分で課題を設定し解決していくことはすごいこと。生活科では、出合ったことを自分で解決することを学ぶが、上の学年に行くと先生主導になってしまいがち。標茶小学校の場合は、自然の中に飛び出していき、自分でこれをやりたいということを先生がプロセスを追いながら教えてあげている。生活科の学びが繋がっていると感じた。

高橋座長 仮説を立て、実験を行い、結果を予想し、実際の結果と照らし合わせて考察するといったやり方は5年生より低い学年でもできるものであろうか。

境委員 十分できるだろう。

及川委員 生活科、理科、総合的な学習の時間がつながっているという視点で言えば、例えば、ミズバショウは水が好きということを感じた後、水が好きなら乾いた土に植えたらどうなるのだろう、という仮説を立てた子がいる。自分で検証したい気持ちを強く持っている。たくさんのことを体感させてもらったことが大きく、その時に必要以上の情報は与えなかった。先生が「乾いたら枯れる」と言ってしまえば、子どもたちは調べようとしなかっただろう。

高橋座長 先生が教えようとする本能をどう押さえるかということだろう。

及川委員 子どもたちはパソコンの中に正解を求めようとするが、実際には言葉が難しくてわからない。パソコンで調べたことの方が見栄えがよいであろうが、自分たちで調べることで子どもたちの中に残っていくだろう。

議事 2 ウェブサイトによる情報発信について

事務局 資料 2 について説明。

高橋座長 WEB サイトには様々な要請があるが、全てが両立するわけではなく、相容れないこともある。今回はこのような形で配布したチラシの構成を用いて、既存のコンテンツに行き着きやすくすることをねらいに改善したい。

渡辺委員 昨年度データセンターの WEB サイトについてヒアリングを受けたが、そのこととの関連はどうなるのか。

事務局 データセンターは釧路湿原の基礎情報を掲載しており、改修を検討している。今年度コンテンツを大きく変更するわけではなく、数年後の改修に向けて情報の整理を検討している段階。WG の WEB サイトとは相互にリンクを張って活用できるようにしていきたい。

中川委員 チラシの印象は柔らかくてよく、情報も整理もされている。このチラシイメージを WEB サイトのトップページに使うのも良い。

高橋座長 事務局から提案された形で進めてよいか。

松本委員 前回 WG の議論で子どもたちが使うのか先生が使うのかわかりやすいと良いという意見があった。子どもたちが使えるものにはその旨マークでわかるようにするなどできるとよい。

畠山委員 現場の先生が湿原学習を行うにあたってホームページを参照する場合は多いだろう。現在のコンテンツの中でも写真データベースなどは、子どもたちでも使えるものということがわかると、使いやすいだろう。それ以外の部分は大人向けでよいと思う。

境委員 見やすくなった。子どもの活用については、トップページに子ども向けの入り口があるとよいかもしれない。

渡辺委員 生徒がプレゼン資料を作る際、素材の著作権が問題となる。資料のダウンロードについてはどうなっているのか。

事務局 WG の WEB サイト掲載情報については、学校での使用許可を得ており、学内での利用は可能。子ども向けコンテンツについて確認させていただきたいが、対象学年は高学年となるであろうか。漢字に振り仮名を振るだけでなく、掲載する語句も対象学年に理解できる言い回しにする必要があるが。

徳田委員 子ども向けという要望はいつも出るが実際には難しい。予算の関係もあり、このサイトは先生が使うことを基本と想定した方がよい。その議論の労力を費やすより、先生で活用できるものとした方がよい。

高橋座長 そうした前提で進めていきたい。

議事 3 これからの取組み予定

事務局 資料 3 について説明。

高橋座長 今後の取組みについて意見をお聞きしたい。学習発表の場の活性化の取組みについては、小学校、中学校から、さらに 1 校から 2 校協力が得られると良いが。

境委員 個人的な考えであるが、標茶小学校の取組みが継続すること、それが標茶町内に波及し、湿原を含めた地域の自然の発表会ができるようになるとうい。釧路市内の学校は湿原から遠いが、自由研究では身近な植物や自然環境を調べるということを行っていると思うので、そこから波及して釧路の自然を学べるとよい。各学校で総合的な学習を行っているであろうが、学校で閉じるのではなく、年 1 回研究発表会などができれば上の学年につながる。それを高校や大学の先生に評価してもらうのもよい。今の取組みに留まるのではなく、広がり視野において取り組んでもらいたい。発表のボードは評価いただいております、他の学校でも活用してもらおうシステムができればよい。

高橋座長 高校や大学とのつながりも考えて取組みを進めることで、単発的な取組みではなくなっていくだろう。

境委員 標茶小学校では評価シートを環境省の自然保護官に書いてもらったが、やりっ放しではなくそうした評価ができるシステムがあるとよい。どのように直したらいいか先生から伝えられれば次のステップにつながる。

及川委員 発表会自体を地域参観にあわせている。ボードには用紙をテープで留めるので、子どもたちは何回でも書き換えることができる。

高橋座長 他校への波及も考えられるとよい。全体を通して意見があればお願いしたい。

畠山委員 小学校 3 年生から 4 年生の社会の勉強で郷土読本釧路というものがあり、3 年生で 1 時間だけ湿原を学ぶページがある。4 年生では水道の関係で水源を守る取組みがあり、湿原を絡めていけるかもしれない。平成 32 年度に教科書が変わるので、来年度、内容を考えなければならない。教科書の内容に合わせながらとはなるが、湿原を取り入れていく場合には協力いただきたい。

事務局 自然再生ガイドブックについて紹介。いわゆる生態系サービスについても触れており、湿原の価値の貨幣換算等も紹介している。部数があるので必要なときにはお声かけいただきたい。

徳田委員 先ほど話があった教科書の作成にも是非活用していただきたい。

高橋座長 事務局にお返すする。

事務局 本会合は年 2 回開催しており、次回は 12 月から 1 月頃の開催を予定している。これで第 7 回学校支援ワーキンググループを閉会する。